

# 大阪商業大学学術情報リポジトリ

## 大阪蔵屋敷に関する研究文献・資料について

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商業史博物館 公開日: 2022-06-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 慶一郎, KATO, Keiichiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1249">https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1249</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 〔研究ノート〕 大阪蔵屋敷に関する研究文献・資料について

加藤 慶一郎

## はじめに

<http://www.cwozaq.ne.jp/oshio-revolt-m/book-kurayasiki.htm>

本稿は「商都大坂の経済基盤―蔵屋敷を中心に―」という論題で行った講演の記録である（二〇一九年八月一三日、於大阪歴史博物館<sup>〔1〕</sup>）。本講演の目的は市民の方々に「商都大坂」の経済基盤として江戸時代に存在した大阪蔵屋敷の歴史の概説であつた。そのため、内容的には通説に概ねしたがっている。本稿では講演の構成に従つて、管見に触れた大阪蔵屋敷研究に関わる資料を紹介するとともに、若干の個人的な気付きを追加したい。なお既存の蔵屋敷関係文献目録に以下のものがある。二〇二〇年一〇月一六日現在で、二〇〇二年九月一六日の更新とされており、合計三九点の資料の書誌情報が掲載されている。本稿ではこれとの重複を厭わず文献や資料類を取り上げている。

## 一 蔵屋敷とは

辞書や辞典には、ある事物の枢要が記載されている。はじめに蔵屋敷の辞典類の説明を確認した上で、若干の補足をおこなうことにしたい。当然のことながら、著者や時代によって力点の所在は異なっている。ここでは上田藤十郎（『日本経済史辞典 上』日本評論社、一九四一年、四一九・四四三頁）、宮本又郎（『日本大百科事典』ジャパンナレッジ版）、堀江保蔵（『国史大辞典』同前）、本城正徳（『世界大百科事典』同前）を取り上げる。

まずすべての著者が、蔵屋敷は大阪だけでなく、大津、堺、敦賀、江戸、長崎の諸都市にも所在したことを述べている。上田、宮本、堀江は蔵屋敷とは藩だけでなく、社寺や宮家、公家の蔵屋敷が存在したことも言及している。しかし、この種の蔵屋敷について明らかにした研究は〔森 二〇〇一〕しかなく（後述）、森泰博はその存在には否定的である。

大阪に所在した蔵屋敷数をいずれも取り上げているが、上田が格段に詳細である。延享四年から「維新前」までの七つの時点の蔵屋敷について、その所在地・名代・蔵元・銀掛屋・蔵屋敷用達の一覧表を作成している。さらに蔵米の販売方法についても詳述している。

堀江にも独自の記述がある。蔵屋敷の役人が対外折衝にも任じた、いわば全権大使の役割を演じた点に言及している。これは森泰博の「在大阪公館」という捉え方と重なる用語である。もう一点特筆すべきは幕末開港後に関する記述で、長崎や大阪において蔵屋敷に商会所を設けて「商会所商業が盛ん」であったとする。上記の二点は本稿でも後に言及する。

いずれも共通して言及した大阪以外の蔵屋敷の存在は興味深い。各地の蔵屋敷の機能や空間的構造などの比較を通じて、藩と全国市場の関係などが浮き彫りになるであろう。水戸藩領内の潮来村は東北諸藩の江戸向け物資輸送の中継港として発展し、仙台藩などが蔵屋敷をおいた〔渡辺 二〇〇二〕。〔森 二〇〇二〕は元和元（一六一五）年に黒田家が堺に新築した屋敷に初めて「蔵屋敷」の呼称が用いられたと

する。敦賀については職務規定などを紹介するほかその終焉についても言及した〔印牧 一九九四〕があるが、大津蔵屋敷の役人への訓令などが紹介されている。〔印牧 一九九六〕には元禄年間の大津蔵屋敷の分布状況や、寛政二年の加賀藩大津蔵屋敷絵図が掲載されている。〔相模 二〇一六〕は大津に所在した彦根藩など6藩の蔵屋敷の空間構造と大阪のそれと比較して、物流・防衛上の原理が空間構成に強く作用していることを明らかにしている。〔尾道 一九九六〕は寛政元年に廃止された対馬藩博多蔵屋敷について、飛地領からの年貢米の移入の拠点であることが論じられている。博多については幕末期の対馬藩蔵屋敷を論じた〔守友 一九九一〕もある。長崎には〔小山 一九九六〕があり、長崎廻米や高利貸商人との関係が述べられている。

## 二 描かれた大阪蔵屋敷

大阪蔵屋敷の姿を視覚的・空間的に理解できる資料として、出版物あるいはデジタル画像として公表されている絵画と地図をいくつかを紹介したい。

まず『久留米藩蔵屋敷屏風絵図』（宮本 一九八二）は眉山玉震が慶応三（一八六七）年に作成したものである。久留米藩蔵屋敷の内部の様子が描かれており、米俵の輸送、荷揚げ、蔵入れ、計量など実務面が詳細に描かれている。

つぎに『浪華勝槩帖』（大阪歴史博物館 二〇一二）をあげる。解説によると、本資料の原本は二冊からなる折本の画帖で、大坂市中とその周辺の景観・風俗・年中行事を筆写したものである。総計九五景が収録されている。大阪代官の竹垣直道が嘉永二（一八四九）年に江戸へ帰る際に二八名に書かせたものである（内海 二〇一三）。蔵屋敷関係では、土佐堀と堂島川が分流する地点、広島藩・久留米藩蔵屋敷前の「多古の松」などが描かれている。

地図類では、大阪に関しては大阪市立図書館のHP内にデジタルアーカイブがあり、「新版大坂之図」（明暦三年（一六五七年））などが閲覧できる。なお、地図類や絵図屏風類にもとづき、長期的にその変遷をたどった論考に〔長友 二〇〇三〕がある。大阪以外の地図として、九州大学デジタルアーカイブスでは博多の地図が閲覧可能で、秋月藩と対馬藩蔵屋敷が確認できる。この地図にもとづいた書籍に〔宮崎 二〇〇五〕がある。

建築史の視点から蔵屋敷絵図を検討したものに、舟入をもつ広島藩大阪蔵屋敷に関する〔伊藤・豆谷 一九九八〕や、西国大名・奥羽諸藩・畿内小藩の大阪蔵屋敷の建築史にとどまらず、松代藩・御三卿清水家大阪蔵屋敷の新機能を指摘があるのが〔植松 二〇一五〕であり、〔森一九九八〕も維新时期に新設された金沢藩蔵屋敷の配置図をあげる（後述）。また先述の〔相模 二〇一六〕も大阪蔵屋敷の配置図などが掲載されている。

### 三 大阪蔵屋敷の成立と発展

大阪蔵屋敷の成立は藩と大阪の成立過程を明らかにする上で重要な論点となる。

蔵屋敷の蔵元などについては、〔作道 一九六八〕が細川藩の慶長・元和期の名代選任などについて検討している。〔森 一九七〇〕が元禄期末の蔵屋敷の蔵元などについて論じているが、〔作道 一九八九〕は町人蔵元に関する森泰博の説と自説について検討を加えている。

蔵屋敷の設置については、〔森 一九八九〕が鳥取藩の大阪蔵屋敷において明暦元（一六五五）年に舟入が設けられ、寛文六（一六六六）年より蔵米販売が始まったことを明らかにしている。〔福田 一九九六〕は寛文元（一六六一）年の福岡藩の大阪蔵屋敷と京都蔵屋敷の定書を紹介している。〔森 一九九〇〕が高知藩の蔵屋敷の設立の契機が大阪城普請助役に関わって生じた借銀を材木売却で返済するためであったとし、〔森 一九九〇〕は佐賀藩・福岡藩・萩藩・高知藩・広島藩・熊本藩の蔵屋敷設置の経緯をまとめている。さらに〔森 一九九四〕も西国諸大名の多くが大阪城再建普請勤役を契機に大阪蔵屋敷を整備したとする。〔森 二〇〇二〕も非常に有益な論考であり、大阪の地誌に旗本や寺社の大阪蔵屋敷の記載があるとの指摘や、「蔵屋敷」の語の初見、舟入を設けた蔵屋敷の立地上の特徴、米切手政策への蔵屋敷留守組合の共闘や、蔵屋敷ないし米蔵の増設が銀主への示威行動である可能性の指摘など成立期を越えて示唆に富む内容と

なっている。「西川 一九七六」は島原藩の享保年間の大阪蔵屋敷の会計・用度関係史料を紹介している。ほかに宮本又次が江戸前・中期の岡山藩と福岡藩の蔵屋敷関係史料を紹介している〔宮本 一九六八①、②〕。

成初期以降の大阪蔵屋敷に関して興味深いのは〔豆谷 二〇一五〕であり、大阪蔵屋敷の廃止にも着目している。たとえば土井氏が唐津から古河へと転封になった際に平野郷町を領地に加え、そこに陣屋を設けている。そのためか、蔵屋敷を堂島新地から天満の魚屋町の川筋から離れた場所へ移転させているという。明暦期から維新期の大阪蔵屋敷数は増加もしくは維持されているが、撤退する藩が存在していたことが分かる。なお、近世後期になると、三郷域外の農村部に蔵屋敷が設立されるようになる。それは例えば福江藩（寛保二）、刈谷藩（同三）、福岡藩（宝暦五）、壬生藩（文化七）、熊本藩（文化十五）など諸藩であり、こうした「大阪蔵屋敷」の増え方にも留意する必要がある。ほかに〔榎森 一九八三〕が松前藩の大阪蔵屋敷について、天保一四（一八四三）年現在のその所在地や紅花や紫根が廻送されたこと、それが文久二（一八六二）年に廃止され、慶応四（一八六八）年に再興計画が検討されるもとん挫したことなどを明らかにしている。また蝦夷地産物取り扱いのための幕府直営販売機関が箱館産物会所であるが、その会所と用達が安政五（一八五八）年に大阪におかれている。その会所を幕府の蔵屋敷とみなすことは適切ではないかも知れないが、関連文献としては、戦前の論文に〔宮本 一九四二〕があ

り、戦後では産物会所を「幕府がもった国産統制計画」とした〔永井 一九六二〕のほか〔守屋 一九七八、一九八二〕などがある。

#### 四 大阪蔵屋敷の諸相

大阪蔵屋敷には蔵米販売以外に、社会的、行政的、経済的な機能や側面があった。次章で取り上げる幕末維新期の大阪蔵屋敷の変貌とともに、今後の論点として興味深い。

##### （一）「武士の町大坂」

大阪における武士を本格的に組上にのせたのは藪田貫である〔藪田 二〇一二〕。それまで大阪在住の武士の人数さえも不分明で、二〇〇人（司馬遼太郎）や渡邊忠司（一万人）など諸説があった。より正確な数値を得るため、藪田は武士を四グループに分け、各々の推定を経て総計八〇〇〇人とした。その内、蔵屋敷の武士は九〇藩の蔵屋敷に各一〇名として九〇〇人とした。

なお喜多川守貞『守貞謾稿』の貨幣編には大阪蔵屋敷に関連して、大阪の武士に関する記述があり、江戸の武士との相違がうかがえる。

大坂には諸大名蔵屋敷あり、蔵屋敷留主居人、国産の売買および金銀のこと専らこれを掌る。正月は長棒乗物にのり、引馬を曳せ、十数人の供をつれ、銀主に新正の祝ひのべ巡るなり。江戸にては

これに与る役人・留主居、駕あるいは歩行にて巡る。

大阪銀主の家ある時留主居駕に乗り鎗を立て送之也 江戸にては歩行にて一僕或は二三僕にて送るのみ

大阪と江戸における武士の外出時の態様を比べると、乗物の種類や供の人数などの点で大阪の方が上等であり、扱いが良かったことが記されている。

## (二) 在大阪公館業務

「在大阪公館業務」とは蔵屋敷の留守居が、蔵物や領内商人と大阪商人の訴訟に関わって大阪町奉行所へ届出や折衝することをさしている〔森 一九八八〕。先の堀江保蔵の「全権大使」と意味合いが重なる蔵屋敷の機能である。森が検出した文政期の府内藩の事例には、登米高の届け出、新任留守居の引き回し、新任大阪町奉行への進物持参、八朔礼、梅の献上などがあり、訪問先には大阪城代などが含まれている。こうした活動を「藩世界」の広がりとして捉え、岡山藩大阪留守居の幕府諸役人などとの関係を見た論考に〔泉 二〇一〇〕がある。

また関連業務として、藩役人と銀主や蔵元との社交がある。福岡藩蔵屋敷では、天保期に藩役人と名代の天王寺屋宗助が、振舞茶屋や鯨漁・遊歩などに同行している〔岡村 二〇一五、大阪商業大学商業史博物館 二〇〇二〕。嘉永期においても、藩役人と銀主と思われる廣岡久右衛門らが能興行見物に出かけるなどしている〔岡村 二〇一五〕。〔金森 二〇〇二〕は大阪詰秋田藩士・介川東馬の日記に

より、シーボルトや頼山陽との出会いのほか、大阪銀主との駆け引きや交際のあり方について論じている。関連する文献として、蔵屋敷の年中行事に触れた〔伊勢戸・谷 一九八八〕、〔中川 二〇〇七〕もある。

より公的な業務として、藩領民の領外での違法行為の取り締まりに、蔵屋敷が関与したという天保期の事例がある。これは、福岡藩の特産物博多織に関わって、その贋造品を播磨地方で贋造する福岡藩領民を捕縛するため、福岡藩蔵屋敷が谷町代官所に助力を依頼したものである。捕縛された犯人は国元から来た福岡藩盗賊方役人へ引き渡されている〔大阪商業大学商業史博物館 二〇〇二〕。

下野国壬生藩の播磨飛地領の村落間争論に対して、大阪蔵屋敷が介入した例がある〔近都 二〇一七〕。壬生藩「大阪蔵屋敷」は、播磨国三木町に所在した飛地領の支配も担ったため「三木御屋敷」と呼ばれたという〔渡邊 一九九八〕。ほかに〔塚田 一九九六〕は単に蔵米販売にとどまらず、近世後期の藩専売制拡大を支持する機能もち、さらに近代大阪の侠客の系譜に蔵屋敷部屋頭との連なりがあったとする。また、〔八木 二〇〇八〕は蔵屋敷を家質として借り入れた佐賀藩が、返済を滞らせたために生じた係争に関わった人的諸関係を浮き彫りにしている。同様に蔵屋敷の社会関係に着目するのが〔森下 二〇〇一〕であり、蔵屋敷をめぐる有力な商人から仲仕にいたるまでの様々な主体が利権をもつ構造が形成されていたことを指摘する。

## (三) 仲仕

蔵屋敷の仲仕も蔵屋敷を機能させるため、必要に応じて厚遇されるなどしていた。たとえば彼らの住居である長屋は「御介抱」のために用意された施設で、家賃はその修理料に宛てられた〔大阪商業大学二〇〇〇〕。こうした処遇の目的は、米価に影響する米質の善悪や登米量に関する言動の抑制、米俵の管理の厳格化などのためであった〔森二〇〇一〕。

また、これは異例であろうが、府内藩が藩札を発行するために大阪の銀札師に発注したところ、その印刷が大幅に遅れたため、大阪蔵屋敷の仲仕に押印作業を担当させて凌いだという事例がある〔森一九八八〕。

## 五 新しい大阪蔵屋敷

幕末維新期に新たに設置された大阪蔵屋敷には、建築物としてそれまでになかった構造や、商業機能面をもつものがあつた。

その背景にあつたのは慶応四（一八六八）年七月大阪の開港であり、〔大阪市 一九三三・一〇二・一〇三頁〕は、外国がそれを求めたのは大阪に諸藩蔵屋敷があり、外国商人が諸藩との取引を望んだためとす。諸藩は長崎の「商会」を大阪へ移転したため、一時期は諸藩の外国貿易は大阪を中心とするかの情勢になつた。しかし、外国人との

取引は不利益に終わることが多かつたため、明治新政府は明治二年二月に開港場に通商司を設置して外国貿易を政府によって統制することとしたのである。

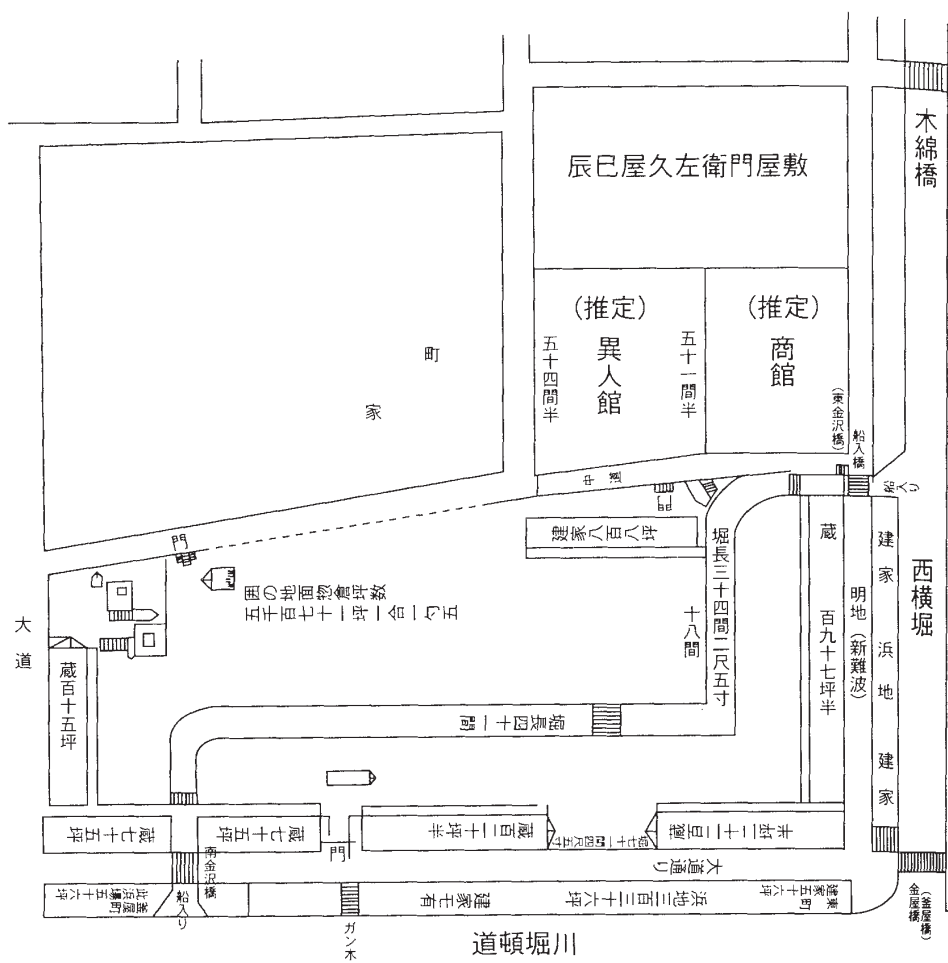
## (一) 加賀藩

加賀藩の蔵屋敷については〔森 一九九八〕が詳しく、特に維新期において大阪蔵屋敷設置にいたる経緯とその建造物としての構造が興味深い。

加賀藩の蔵米は量が多く、元禄四（一八九一）年に大阪廻米量二〇万石に達した。しかし、蔵屋敷は借蔵の使用に留まっていた。幕末になって大阪蔵屋敷取得の建議が行われ、明治元年十月に内定した。そして、明治三年四月に五〇〇坪の敷地と七〇〇坪の米蔵をもつ蔵屋敷が新設されたのである。その際に蔵元として土地と資金を提供したのが辰巳屋久左衛門であつた。

この加賀藩蔵屋敷の特徴は付設された商館と、和洋折衷の家屋（異人館）にあつた。さらにその平面図を見ると（図一）、舟入が敷地内に二か所設けられており、道頓堀川から入船して西横堀川へ抜ける、より効率的な設計がほどこされていたのである。まさに新時代の蔵屋敷であつた。しかし、大阪における外国貿易の繁栄に反して、同業者が続出したため成績は振るわなかつたようである。

【図1 金沢藩新大阪蔵屋敷】



注：〔森 1998〕80頁から転載。原資料は宮本又次「加賀藩蔵屋敷制度に関する資料紹介」『大阪の研究 第4巻』（清文堂出版、1970年）、169頁および『大阪実測図』内務省地理局・大阪府、1888年より森泰博が作成。

## (二) 松代藩

松代藩の大阪蔵屋敷も新時代を展望していた。この点については「荒武二〇一一」や「植松二〇一五」が取り上げている。以下の叙述はこれらが利用している国文学研究資料館所蔵真田家文書にもとづいている<sup>3)</sup>。

信濃国松代藩は嘉永期以降、葉の原料の杏仁や甘草などの特産物を大阪で販売するようになった。そして慶応三（一八六七）年ころから在藩役人が大阪蔵屋敷設置計画を立案し、河内国の豪農から資金の提供を受けるなどして蔵屋敷を購入した。

当時の在阪役人の認識は「世界万国と並立の体」であり「御国威御振張」が必要であり、「御国産東西に輸出」の重要性を主張していた。さらに大阪蔵屋敷についても、これを小大名や商人と同様に「蔵所」と呼んでも差し支えなく、京都や東京と違って家格とは無関係である。屋敷と表門の大きさ、



土蔵の数は商品の多寡に対応しているとの見解を示している。

このように新時代に対応した、合理的な蔵屋敷理解の下、明治四年正月に整備がほぼ終了した松代藩蔵屋敷であったが、同年七月の廢藩置県により廢止された。結局、同五年五月に蔵屋敷は大阪府へ引き渡されることになった。さらに本設置計画を主導した担当役人も大阪府の職員に転じたのである。

## おわりに

以上、管見に触れた蔵屋敷に関係する文献や資料について雑駁な紹介をおこなった。その中で気になったことを三つ挙げておきたい。

一つは寺社や宮家など、大名以外の蔵屋敷の存在である。すでに戦前に指摘があったことは上述のとおりであるが、その後実証が深められたとは言えないが、辞典類では古い指摘が引き継がれているのが現状である。なお、「森 二〇〇一」は蔵屋敷の実質的機能に疑問を呈しているが、推測に留まっている。

もう一つは三郷域外への蔵屋敷の設置である。その理由や、設置後の状況などについてさらに解明の余地がある。地理的には連続しているかもしれないが、行政的・司法的にとのようないずれがあるのかなど、「大阪蔵屋敷」の実像を捉えるうえで有効な素材ではないだろうか。

最後が維新期の大阪蔵屋敷の機能や構造の変容である。その契機は外国貿易の開始であるが、組織として「商会」、建造物として「商館」といったように名称も変化している。「作道 一九九〇」によれば国内貿易や外国貿易をおこなう藩役人や御用達商人の結社との説明があるが、この点についても実証の深化を期待したい。

## 〔参考文献〕

- ・荒武賢一朗「在坂役人の活動と蔵屋敷問題―幕末維新期の混乱とその特質―」（荒武賢一朗・渡辺尚志編『近世後期大名家の領政機構 信濃国松代藩地域の研究Ⅲ』岩田書院、二〇一一年）
- ・泉正人「藩世界と大坂―天保期岡山藩大坂留守居を中心に―」（岡山藩研究会編『藩世界と近世社会』岩田書院、二〇一〇年）
- ・伊勢戸佐一郎・谷直樹「佐賀藩大坂蔵屋敷の建築と年中行事」（『大阪の歴史』二五、一九八八年）
- ・伊藤純・豆谷浩之「新出広島藩大坂蔵屋敷絵図について―浅野文庫本絵図の紹介―」（『大阪の歴史』五一、一九九八年）
- ・印牧信明「津輕藩の敦賀蔵屋敷と廻米制について」（『海事史研究』五一、一九九四年）
- ・植松清志編著『大坂蔵屋敷の建築史的研究』思文閣出版、二〇一五年
- ・内田九州男「近世初頭大坂の支配について―国奉行制と大坂藩―」（『歴史評論』三九三、一九八三年）
- ・榎森進「松前藩の大坂蔵屋敷」（海保嶺夫編『北海道の研究 第三卷 近世篇Ⅰ』清文堂出版、一九八三年）
- ・大阪商業大学商業史博物館『大阪商業大学商業史博物館史料叢書 第三卷 蔵屋敷Ⅲ』同館、二〇〇二年
- ・大阪市『明治大正大阪市史 第三卷（経済編 中）』清文堂出版、一九三三年（一九六五年復刻版）

- ・大阪歴史博物館編『大阪歴史博物館 館蔵資料集八―浪華勝槩帖―』大阪歴史博物館、二〇一二年
- ・岡村良子「浪速話方日記」にみる武士と町人のおつきあい』『大阪商業大学商業史博物館研究紀要』一六、二〇一五年
- ・尾道博「博多における対馬藩蔵屋敷（対州屋敷）について―『宗家文庫』を中心にして―』『福岡県地域史研究』一四、一九九六年
- ・金森正也「秋田藩士・介川東馬と上方銀主―その「交流」の虚実―」荒武賢一朗・野本禎司・藤方博之編『古文書が語る東北の江戸時代』吉川弘文館、二〇二〇年
- ・近都兼司「近世中期壬生藩上方領における村落間争論と大坂蔵屋敷」『市史研究みき』二、二〇一七年
- ・栗三直隆「富山藩の京都屋敷と大坂蔵屋敷」『富山史壇』一八七、二〇一八年
- ・後藤真一「尾張藩京都屋敷とその役職者たち」（岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究《第五篇》』清文堂出版、二〇一二年）
- ・小山幸伸「長崎御勘定方と長崎蔵屋敷の機能について」『幕末維新期長崎の市場構造』お茶の水書房、二〇〇六年
- ・相模晋雄「近世期の大阪蔵屋敷の空間構成に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』八一（七二八）、二〇一六年
- ・作道洋太郎「細川藩の大阪蔵屋敷について」（宮本又次編『大阪の研究 第二卷』清文堂出版、一九六八年）
- ・作道洋太郎「蔵屋敷」『新修大阪市史 第三卷』大阪市、一九八九年
- ・作道洋太郎「諸制度の変革と経済変動」（『新修大阪市史 第四卷』大阪市、一九九〇年）
- ・佐古慶三「佐賀藩蔵屋敷払米制度」大阪史学会、一九二七年
- ・佐古慶三・亀山茂三編『新撰増補大坂大繪圖…堂社佛閣繪入…諸大名御屋敷（古板大坂地図集成）』清文堂出版、一九七〇年
- ・高槻泰郎「大坂堂島米市場 江戸幕府 v s 市場経済」講談社、二〇一八年
- ・谷直樹編『大坂蔵屋敷 天下の台所はここから始まる』大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）、二〇一七年
- ・塚田孝「都市社会のなかの蔵屋敷」（塚田孝『近世の都市社会史』青木書店、一九九六年）
- ・永井信「箱館産物会所の性格と意義―幕末産業統制の破綻―」『北大史学』八、一九六二年
- ・中川桂「久留米藩の大坂蔵屋敷勤番日記に見る芸能享受」『芸能史研究』一七九、二〇〇七年
- ・長友朋子「大坂図と絵図屏風からみた大坂蔵屋敷―久留米藩蔵屋敷を中心として―」大阪大学埋蔵文化財調査室編『久留米藩蔵屋敷跡』大阪大学埋蔵文化財調査委員会、二〇〇三年
- ・西川源一「島原藩の大坂蔵屋敷（その一）―大坂詰諸覚書および日記から―」『経営と経済』五五（四）、一九七六年
- ・野村正臣「大阪に於ける蔵屋敷に就いて（一）」（四）『同志社論叢』三三―三五、四〇、一九三三、一九三三年
- ・福岡県（森泰博）「藩財政と大坂蔵屋敷」『福岡県史 通史編福岡藩（一）』福岡県、二〇〇二年
- ・福田千鶴「福岡藩政前期の京都・大坂蔵屋敷及び算用所関係史料の紹介」『福岡県地域史研究』一四、一九九六年
- ・豆谷浩之「大坂蔵屋敷の所有と移転に関するノート」『大阪歴史博物館研究紀要』一三、二〇一五年
- ・宮崎克則「福岡アーカイヴ研究会編『古地図の中の福岡・博多 一八〇〇年頃の町並み』海鳥社、二〇〇五年
- ・宮本又次「箱館産物会所」『経済史研究』二八（二）、一九四二年
- ・宮本又次「大阪の岡山藩の蔵屋敷史料の紹介」（宮本又次編『大阪の研究 第二卷』清文堂出版、一九六八年①）
- ・宮本又次「福岡藩と大阪との関係史料紹介―特に蔵屋敷関係資料―」（宮本又次編『大阪の研究 第二卷』清文堂出版、一九六八年②）
- ・宮本又次「久留米藩大坂蔵屋敷と蛸の松 久留米藩蔵屋敷屏風絵図 参

- 考 蛸の松」『福岡県地域史研究』一、一九八二年
- ・森下徹「萩藩蔵屋敷と大坂市中」(塚田孝・吉田伸之編『近世大坂の都市空間と社会構造』山川出版社、二〇〇一年)
- ・守友隆「幕末期博多の対馬藩蔵屋敷についての一考察」『福岡地方史研究』二九、一九九一年
- ・森泰博「元禄末大坂蔵屋敷・名代・蔵元・銀掛屋」(宮本又次編『大阪の研究 第四卷』清文堂出版、一九七〇年)
- ・森泰博「府内藩大坂蔵屋敷の業務」『大阪の歴史』二五、一九八八年
- ・森泰博「鳥取藩大坂蔵屋敷の成立」『商学論究』三七(一、四)、一九八九年
- ・森泰博「初期の高知藩大坂蔵屋敷」『経済学論究』四四(三)、一九九〇年
- ・森泰博「大坂蔵屋敷の成立」高井眞・橋本徹編『関西学院大学産研叢書一四 大阪経済のダイナミズム―企業環境の変遷と展望―』清文社、一九九〇年
- ・森泰博「福岡藩大坂蔵屋敷」『西南地域史研究』八、一九九四年
- ・森泰博「金沢藩大坂蔵屋敷の新設」『経済学論究』五二(二)、一九九八年
- ・森泰博「大坂蔵屋敷の成立と変貌」(大阪商業大学商業史博物館編『史料叢書 第二卷 蔵屋敷Ⅱ』同館、二〇〇一年)
- ・森泰博「鴻池善右衛門の大名貸―掛合控の成立を中心として―」(宮本又次編『上方の研究 第三卷』清文堂出版、一九七五年)
- ・守屋嘉美「幕府の蝦夷地政策と箱館産物会所」(石井孝編著『幕末維新期の研究』吉川弘文館、一九七八年)
- ・守屋嘉美「箱館産物会所と『元仕入仕法』―幕末期幕政改革との関連で―」(海保嶺夫編『北海道の研究 第四卷 近世篇Ⅱ』清文堂出版、一九八二年)
- ・八木滋「史料紹介」佐賀藩大坂蔵屋敷のネットワーカー「家賃公訴内済記録」を通して―『大阪商業大学商業史博物館紀要』九、二〇〇八年
- ・藪田貫「武士の町 大坂「天下の台所」の侍たち」中央公論新社、

二〇一〇年

- ・山中雅子「尾張藩京都御用所の設立とその運営について」(岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第五篇』清文堂出版、二〇一二年)
- ・脇田修監修『図説大坂 天下の台所・大坂』学習研究社、二〇〇三年
- ・渡邊忠司『町人の都 大坂物語 商都の風俗と歴史』中央公論社、一九九三年
- ・渡邊忠司「大坂三郷町続き在領における蔵屋敷の設置について―下福島村下野壬生藩蔵屋敷の場合―」『大阪の歴史』五一、一九九八年
- ・渡辺英夫『東廻海運史の研究』山川出版社、二〇〇二年

## 注

- (1) 企画の主旨は、大阪歴史博物館と本学が蔵屋敷をテーマにした連携展示「博学連携展①」商都大阪の文化力 大阪商業大学×大阪歴史博物館」である(会期二〇一九年八月二一日～十月十四日)。開催にあたっては、かんさい・ミュージアム連携実行委員会のご協力を賜っている。
- また、関連講座「商都大阪の遊びと文化」においては、「拳の文化史」(高橋浩徳、大阪商業大学 アミューズメント産業研究所研究員)、「浪花大坂の文化事情」(明尾圭造、大阪商業大学准教授、商業史博物館首席学芸員)と、公開シンポジウム「博学連携事業の展望と課題―多様な所蔵資料とその可能性―」(主催：かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会)が行われた。
- (2) 喜多川守貞著・宇佐美英機校訂『近世風俗志(守貞謄稿)』(一)岩波書店、一九九六年、三七八・三七九頁。
- (3) け三二〇・七「関田莊助申上書「御蔵屋敷取建」」、け三二一・一九「関田莊助書状「一新後も大坂にて会所を可取立事」」、け三二一・一「関田莊助申上書「買上事情上申」」、け三二一・九「関田莊助再申上書」。